

2900枚、出版社の方に教えていただいた。原稿用紙2900枚になるそうである。960号を超えた「校長室だより～燦燦～」の原稿を原稿用紙にすると、2900枚になるとのことだった。大学4年生のときに、原稿用紙140枚ほどの卒業論文に、四苦八苦、悪戦苦闘していた人間である。変われば変わるものである。ちりも積もれば山となるということか。

もともとは、この校長室だよりを本にしようなどとは、考えてはいなかった。ところが、いつも読んでいただいている読者の方に、「本にしないんですか」「本にしたほうがいいですよ」「本にしてください」などと言われると、だんだんとその気になってくるから不思議である。加えて、去年の9月に国語の書籍を出版したことで、勢いがついてしまった。

問題は、膨大な原稿の量である。これをそのまま書籍にすれば、分厚い国語辞典のようになってしまうのは明らかである。では、どうするか。以前、ネットで出版社を探しているときに、メールで問い合わせをしたことがある出版社から案内が届いた。12月中旬に、福島市で出版相談会を開くというのである。福島でやっていただける。これはとりあえず行くしかない。

いろいろと相談してみた。結論は、一度、原稿を送ってくださいということだった。これが容易ではない。A4判、950枚分のデータである。これをメールで送るのである。データをつなげるしかない。高校編、中学校編①、中学校編②の3つに分けることにした。データ化の作業をするついでに、本にすることを考えた場合に、この原稿はいらないというものを省くことにした。第一次選考である。

というわけで、改めて第1号から読み直した。結局、第一次選考を通らず、ボツとした原稿は少なかった。私の中に、結論をプロの出版社の方に委ねたいという思いが働いた。結果的に、膨大な量のデータが、年末だというのに出版社に送られることとなった。果たして、本当に読んでもらえるのだろうか。一抹の不安がよぎった。

出版社からは、「これから私も含めて弊社のスタッフ複数名でしっかり拝見させていただきます。少々お時間を頂戴しますが、1月中には弊社の見解をお伝えできるよう動いて参ります」という丁寧なメールが届いた。どうやら読んでではもらえそうである。1月下旬まではかかるだろう。そう思った。同時に、これは本にならない可能性も十分あることを覚悟した。

1月中旬だった。自宅に郵便物が届いた。出版社からだった。「書類」とあった。きっと出版の案内か何かだろうと予想した。封を開けた。文面を読んでいくと、案内ではないことはすぐにわかった。

(次号に続く)